山梨県立博物館 シンボル展

『木喰上人作 木彫佛』

—身延の木喰さん、世に出るその最初—

二〇一九年　一月一二日（土）～二月二五日（月）

山梨県立博物館
Yamanashi Prefectural Museum

身延の〝木喰〟さん

木喰（行道。五行・明満とも名乗る）は、享保三年（一七一八）、現在の山梨県身延町丸畑に生まれた僧侶です。二二歳で出家し四五歳で「木食戒」を受け、日本全国を巡り歩く廻国修行を行いました。「木食戒」とは、米や麦などの五穀を断つ大変厳しい修行を伴うものでした。木食戒を修する僧侶は、自身の名前の前に「木食」とつけて「木食〇〇」と名乗りましたが、口偏のついた「喰」の字を使うのが身延の〝木喰〟さんの特徴で、今では彼の代名詞のようになっています。

木喰は文化七年（一八一〇）に亡くなるまで廻国修行を続け、全国各地に仏像を彫り残しました。その数は一〇〇〇体以上とも言われ、現在では七〇〇体ほどが確認されています。彼が制作した仏像は一般に「木喰仏」と呼ばれます。満面の笑みを浮かべたものが多いことから「微笑仏」とも呼ばれ、今も多くの人に親しまれています。

木喰仏の発見

大正一三年（一九二四）一月九日、民芸運動の創始者として知られる柳宗悦は、中巨摩郡池田村（現甲府市）の小宮山清三宅を訪れました。小宮山清三は当時池田村の村長を務めており、美術品の収集家として朝鮮陶磁器などを所蔵していました。この日も柳は朝鮮陶磁器を見るために小宮山宅を訪れましたが、偶然、木喰仏と出会い、その微笑の虜になったのです。柳が心を奪われた木喰仏は、蔵の前に置かれていた《地蔵菩薩像》《無量寿如来像》と座敷に置かれていた《弘法大師像》の三体でした。小宮山は思いがけない柳の驚嘆ぶりに、その場で《地蔵菩薩像》を贈呈することを申し出ました。《地蔵菩薩像》は一月一六日には柳の手元に届き、彼を木喰研究へと駆り立てる原動力となったのです。

弘法大師像

地蔵菩薩像

甲府の小宮山清三宅で柳が出会った木喰仏。現在《地蔵菩薩像》は日本民藝館、《弘法大師像》は山梨県立博物館の所蔵となっている。

『木喰上人作 木彫佛』発行後の木喰研究

『木喰上人作　木彫佛』発行後も、柳の木喰調査は続きました。発行後の九月には滋賀県東近江市竹田神社《狛犬》を、翌大正一五年（一九二六）二月に河井寛次郎、濱田庄司、桑名節（カメラマン）とともに京都南丹市の清源寺《十六羅漢像》や蔭涼寺《薬師三尊像》《自刻像》を発見しています。その後、柳は本格的に民芸運動に邁進していくことになり、彼の木喰調査は終息を迎えます。

小宮山家で木喰仏と偶然の出会いを果たしてからおよそ二年間、柳は全国各地で埋もれていた木喰仏を発見し、その成果を公表して多くの人々に木喰とその作品を知らしめました。しかしそれは、各地の協力者の支えにより成しえたことであり、とりわけ「木喰五行研究会」を設立し、研究の推進を全面的に支援した山梨の人々の力は大きかったと言えるでしょう。なかでも小宮山清三は私財を投じて柳の活動を支援し、小宮山の存在なくしては、木喰が世に出ることは無かったと言っても過言ではありません。

木喰がこの世に生を受けてから、すでに三〇〇年が経ちました。柳を虜にした木喰仏の微笑は、今なお多くの人を魅了してやみません。そして柳によって道が拓かれた木喰研究は、木喰の故郷山梨の人々の支援により全国に広まり、現在も続いているのです。

主な参考文献・資料

- 「附録 上人發見の縁起に就て」『木喰五行上人畧傳』　大正一四年
- 「木喰五行研究會々則」『木喰上人之研究』第一号　大正一四年
- 「彫刻寫眞配布に就て」『木喰上人之研究』第二号　大正一四年
- 『木喰五行上人の研究』（木喰上人之研究特別号）　大正一四年
- 「木喰上人の遺作を全国に調査して」『東京朝日新聞』　大正一四年四月二四日
- 「木喰通信」（大正一三～一四年に各新聞に掲載された柳の書簡をまとめたもの）
  ※以上は『柳宗悦全集著作篇』第七巻（筑摩書房、昭和五六年）に収録。
- 「木喰上人研究経過報告」『木喰上人之研究』第一～五号　大正一四～一五年
- 日向保編『木喰五行上人』　三省堂書店　昭和一〇年
- 森谷美保「柳宗悦の木喰研究—大正末期に起こった木喰仏発見の騒動について」『生誕二九〇年 木喰展 庶民の信仰—微笑仏』図録　神戸新聞社　平成一九年
- 森谷美保「柳宗悦と山梨の木喰研究者たち—新発見の資料「覚書」「柳宗悦書簡」を中心に」身延町なかとみ現代工芸美術館 開館二十周年事業『生誕三百年 木喰展～故郷に還る、微笑み。～』　身延町　平成三〇年

新潟県魚沼・大月観音堂の《如意輪観音菩薩像》と
（大正14年8月23日撮影）

如意輪観音菩薩像（教安寺七観音菩薩像のうち）

『木喰上人作 木彫佛』には、火災や戦災などで焼失したり、亡失してしまった像の写真も含まれる。教安寺（甲府市）の七観音菩薩像は木喰が最後に制作した彫刻作品として知られているが、昭和20年（1945）の甲府空襲で焼失してしまった。しかしその姿は本書の写真によって詳細に知ることが出来る。

シンボル展
『木喰上人作 木彫佛』
—身延の木喰さん、世に出るその最初—

編集・発行
山梨県立博物館
〒406-0801 山梨県笛吹市御坂町成田1501-1
電話 055-261-2631

出品者、写真撮影・提供、協力者（敬称略）　日本民藝館、身延町、身延町教育委員会、小島梯次、山梨放送　岡敦夫、白土慎太郎、竹本春二、深沢広太

本リーフレットはシンボル展「『木喰上人作　木彫佛』—身延の木喰さん、世に出るその最初—」（2019年1月12日（土）～2月25日（月））の内容を紹介したものであり、展示資料のすべてを掲載したものではありません。なお、書名や引用部分については『柳宗悦全集著作篇』第7巻の表記に従いましたが、一部新字に改めるなどしました。本リーフレットはJSPS科研費JP16K02293の助成を受けた成果の一部であり、本文の執筆・編集は近藤暁子（当館）が行いました。

印刷　**株式会社 内田印刷所**　〒400-0032　山梨県甲府市中央2丁目-10-18　電話 055-233-0188

平成31年1月12日発行

木喰の故郷へ　自筆資料の発見

その年の六月九日、柳は木喰調査のために再び山梨を訪れます。この間、柳と小宮山は手紙のやりとりを続け、小宮山が集めた木喰に関する情報が柳にもたらされていました。その情報をもとに、柳は木喰の故郷である丸畑を訪ね、木喰自身が記した『四国堂心願鏡』や『南無阿弥陀仏国々御宿帳』など、木喰研究を進める上で重要となる資料を見つけることができたのです。この時の調査では、永寿庵《五智如来像》や山之神神社《山神像》などの木喰仏も発見されています。一方、木喰が丸畑に建立した四国堂とその安置仏は既に散逸してしまっていることもわかったのです。

さらに一ヵ月後、七月三日に再び丸畑を訪れた柳は、同行した小宮山や石部惟三らの力添えにより、木喰の自筆資料を借り受けることができました。こうして、柳の木喰研究はいよいよ本格的に深まることとなったのです。

木喰仏を求めて

柳による木喰仏探索の旅は大正一三年（一九二四）八月から精力的に行われました（年譜参照）。調査は新潟や四国・九州など広範囲にわたるもので、一年にも満たないわずかな期間に三五〇体に及ぶ木喰仏が発見されました。今とはくらべものにならないほど不便な当時の交通事情を考えれば、驚異的な行動力と言えます。さらに調査を始めて間もない大正一三年九月には、「木喰五行上人の研究」（第一回）を『女性』に発表し、丸畑で発見された『四国堂心願鏡』の内容などについて紹介しています。柳のこうした活動を通して、木喰は全国的に知られていくこととなるのです。

柳による丸畑調査時の写真（大正14年頃撮影）
中央の毛皮の帽子を被っているのが柳。《山神像》を取り囲むように、人々が写っている。

日向国分寺調査時の写真（大正14年1月8日撮影）
柳とともに写っているのは《弘法大師像》と《唐獅子台》で、現在西都市歴史民俗資料館の所蔵となっている。

柳宗悦 木喰調査年譜～『木喰上人作 木彫佛』ができるまで～

元号（西暦）	月	事績
大正一三年（一九二四）	八月	新潟県佐渡方面。一〇日から佐渡に渡り、木喰堂（九品堂）を発見。この時の滞在で《九品仏》《自刻像》はじめ、一四体の仏像や多くの掛軸等を確認した。その後、柳は佐渡の郷土史家たちと連絡を取り、現地での調査は彼らの手により発展した。
	九月	栃木県鹿沼方面。二日、栃窪を訪れ薬師堂を発見、堂内に薬師三尊像と十二神将像を確認した。 静岡県浜松方面。三〇日、《十王像》《葬頭河婆像》などを発見。本来安置されていた十王堂は廃仏毀釈の影響で既に無く、像は近くの寿龍院に遷されていた。
	一〇月	新潟県小千谷・長岡・柏崎・上越方面。一二日から一九日までの八日間で、木喰観音堂・真福寺・十王堂などを訪ね、一〇七体の仏像等を確認した。この調査は、小宮山清三らが九月に行った事前調査の成果を受けて行われた。
	一二月	静岡県静岡・藤枝方面。一〇、一一日頃、静岡泉秀寺、藤枝梅林院にて木喰仏を発見。
大正一四年（一九二五）	一月	宮崎県西都方面。一月五日から一〇日まで九州滞在。大分県別府・豊後竹田などを経て、宮崎県西都市の国分寺を訪ね《五智如来像》《弘法大師像》、佐土原の《釈迦如来像》などを確認した。《五智如来像》の存在は、事前調査を依頼していた友人の武者小路実篤から知らされていた。
	二月	香川県・愛媛県方面。一八日から二二日まで五日間にわたり調査を行ったが、発見された仏像は愛媛県光明寺の《如意輪観音菩薩像》と《子安観音菩薩像》の二体のみだった。
	三月	長野県方面。六日、茅野の社宮寺《十一面観音菩薩像》、富士見法隆寺十一面観音堂《普賢菩薩像》を調査。
	四月	山口県・島根県方面。三日から一二日まで、一九体の木喰仏を発見した。
	七月	京都府京丹波龍泉寺。浅川巧、河井寛次郎、岡田恒一、柳兼子とともに、《釈迦如来像》《阿難像》《迦葉像》《自身像》を発見した。三〇日、『木喰上人作 木彫佛』発行。

木喰五行研究会の発足

柳がこれほどに精力的な調査を行うことができた背景には、木喰仏が伝わる地域の郷土史家など協力者の存在と尽力がありました。山梨では、大正一三年夏頃から木喰に関する記事が頻繁に『山梨日日新聞』に掲載され、木喰のことや柳らによる調査の様子が広く報じられるようになっていきます。柳の言葉を借りれば「幕末に於ける最大の彫刻家」（『木喰五行上人の研究』）である木喰に多くの人が関心を寄せたのでしょう、柳の調査をきっかけに木喰仏発見への気運が全国的に高まった様子は、新潟や宮崎など、木喰仏が見つかった地域の新聞でその様子が報道されていることからもうかがい知ることができます。

そうした状況の中、同年一二月二九日には「木喰五行研究会」が山梨で発足することとなります。柳から、調査が広範囲に及び必要な経費も増えてくることについて相談を受けた小宮山は、研究会の設立を発案したようです（同年九月一四日付・一〇月一日付小宮山宛柳書簡）。研究会の会則には、木喰に関わる遺跡保存や思想の普及とともに、柳の研究を援助することが会の目的であると記されています。また、常務世話人として、小宮山をはじめ柳の研究を最初から支えてきた山本節、村松志孝（しこう）、雨宮栄次郎、若尾金造、野々垣那富、野口二郎ら七名の名が挙げられています。『山梨日日新聞』は、発足の日に「木喰号」と題した特集を組み、大々的に報じています。研究会の援助を受けて、柳の木喰研究はますます進展していきました。その様子は研究会誌として発行された『木喰上人之研究』に研究経過報告などとともに紹介されています。

『木喰上人作 木彫佛』の発行

大正一四年（一九二五）四月以降、木喰五行研究会の主催で木喰の展覧会や講演会が開催されていきます。展覧会は、東京・山梨・京都などを会場とし、出品された木喰仏は六〇体ほどでした。こうした展覧会の開催とともに準備が進められたのが、写真集『木喰上人作 木彫佛』です。

本書は同年七月三〇日に「甲種」「乙種」の二種類、それぞれ一五〇部ずつあわせて三〇〇部が発行されました。各本に柳の直筆による署名と番号が記されています。内容は、柳が執筆した「序」「凡例」「上人の一生と其遺作」と一〇四点の写真から成り、「上人の一生と其遺作」には、木喰の生涯とともに掲載写真の解説が記されています。写真には仏像だけでなく、木喰ゆかりの神社仏閣の建物や風景、書画なども含まれました。「凡例」によれば、製版は大塚稔（美術印刷などを手がける大塚工藝社の創始者）、出版に関わる諸事は式場隆三郎（柳と交流があった精神科医）、経済的な援助は小宮山が行ったとあり、多くの関係者の尽力により本書が出版されたことがわかります。

「甲種」「乙種」は同じ内容ですが、「甲種」は綴り製本されたもの、「乙種」は帙（ちつ）装で、写真を一枚ずつ手にとって見られる形式に整えられました。「凡例」には、「甲種」の装丁は柳自身が担当し、山梨の地場産業に関わる印伝や和紙を使ったこと、写真撮影にはできるかぎり気を配ったことなどが記されています。

掲載写真は柳がそれまでの調査で撮りためてきたものでした。柳は調査にカメラマンを同行しています。時には現地近くで手配したようですが思うようにいかないことも多かったらしく、次第に信頼できるカメラマンを同行するようになったようです。

本書のどの写真を誰が撮影したかについてははっきりしていません。柳が調査で協力を得たカメラマンとして名前を挙げているのは、山崎静村、大塚工藝社の大塚稔・並木毅夫、野々垣那富、八代忠雄の五名です。そのうち、並木は宮崎調査、八代は新潟県小千谷・長岡・柏崎・上越方面の調査に同行したようです。山崎静村は東京写真研究会のメンバーで、友人である写真家・野島康三を介して柳の撮影に関わることになったと考えられています。また、野々垣は木喰五行研究会の世話人の一人で、四国・長野・甲府教安寺・山口島根調査に同行したことが『木喰上人之研究』各巻の研究報告に記されています。

柳は「日本の今迄の古作品の写し方に私は前から不満を抱いてゐた。私は私の見方を上人の作で試みたつもりでゐる。」（「彫刻寫眞配布に就て」）と述べています。調査で撮影した写真は、柳が木喰仏に注いだ篤い眼差しそのものと言えるのではないでしょうか。

本書の発行にあたり「此出版は内容はもとより製版も装幀も他にひけをとらないつもりでゐる。」「出版界空前の大著と云っても過言ではなからうと思ふ。」（「六號雑記」『木喰上人之研究』第四、五号）と柳は述べています。この言葉の通り、本書は柳の木喰研究の集大成というに相応しい存在と言えるでしょう。

〔乙種〕〔甲種〕

『木喰上人作 木彫佛』「甲種」「乙種」（山梨県立博物館蔵）
「甲種」は70円、「乙種」は60円で販売された。『木喰上人之研究』に掲載された広告によると、研究会会員には特別価格での販売もなされたようである。なお、大正15年の公務員の初任給は75円だった。
「甲種」：縦51.0 横36.5 厚6.7（cm）「乙種」：縦51.0 横35.0 厚6.8（cm）

木喰五行研究会発行の
『木喰上人之研究』第1～5号（山梨県立博物館蔵）
会員の活動の記録である「研究経過報告」「会員名簿」などが掲載され、当時の状況を物語る。
いずれも縦22.8 横15.5（cm）